



昨年度はコロナ禍で入国制限があるなか、39名(13校)の児童生徒が初期支援コースで学びました。今年度も、多くの方に外国人児童生徒教育について知っていただくために、初期支援コース通信を発行します。初期支援コースの子どもたちの学びの様子や指導実践、外国人児童生徒指導・支援のヒントなどをお伝えしていけたらと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

母国での学習状況について



「みらい」では4月から新テキスト「みらいのにはほんご」を使って、指導をはじめました。このテキストは、Stage1「サバイバル日本語・生活適応」、Stage2「日本語基礎～基本文型～」、Stage3「日本語基礎～単文から複文へ～」と3部構成となっています。4月の外国人児童生徒担当者連絡会でご紹介しましたが、市役所内の「日本語リソースルーム」から貸し出しもしています。ご興味のある方は、「日本語リソースルーム」へご連絡ください。

今回の通信では、Stage1の第7課「ぼくのがっこう」をご紹介します。「ぼくのがっこう」は、子どもたちが母国の学校の1日や学習経験についてアンケートに答える活動です。外国人児童生徒の指導・支援をするうえで、母国での成育歴や学習状況を把握することは大切です。子どもたちの背景を知ることで、彼らの経験や知識を生かしたり、補ったりするような指導や支援を考えることができます。

下記の表は、「みらい西」通級生のアンケート結果の一部です。国や地域または公立・私立の違いによって、母国での学習状況は様々です。この結果から、技能教科の学習経験が乏しいことがわかります。「みらい」では、レクリエーション(昼放課)の時間にリコーダーやミシンなどの活動を取り入れ、在籍校での学習にスムーズに参加できるようにしています。

※これは一例で、その国の全ての学校が同様とは限りません。

技能教科 (経験あり○、経験なし×)		中国 小学校	中国 中学校	ブラジル 公立小	フィリピン 私立中	ネパール 私立小
音楽	合唱	○	○	×	○	×
	リコーダー	×	×	×	○	×
	楽譜	×	×	×	○	×
	音楽鑑賞	○	○	×	○	×
体育	陸上	○	○	○	○	×
	鉄棒	○	○	×	×	×
	跳び箱	○	×	×	○	×
	マット	×	×	○	×	×
	水泳	×	×	×	○	×
家庭科	裁縫	×	×	×	○	×
	ミシン	×	×	×	○	×
	調理	×	×	×	○	×
技術	木工	×	×	×	○	×
	コンピュータ	○	○	○	○	○
美術	絵	○	○	○	○	○
	彫刻	×	×	×	○	×



学校行事 (経験あり○、経験なし×)	中国 小学校	中国 中学校	ブラジル 公立小	フィリピン 私立中
定期テスト	○	○	○	○
体育祭	○	○	×	○
文化祭	×	×	×	○
野外教育活動	×	×	×	○
修学旅行	×	○	○	○
福祉体験	×	×	×	○
職場体験	×	×	×	○
身体測定	○	○	○	○
高校入試	○	○	×	○



こちらは、学校行事のアンケート結果です。体験学習や泊を伴う活動を経験している子どもたちが少ないことがわかります。

学校行事は、事前に写真や動画を使って子どもたちに丁寧に説明することで、子どもたちの不安が軽減され、行事への前向きな参加を促すことができます。

「みらい」では、「日本の学校の1年間」という学校行事について紹介する授業をおこなっています。子どもたちは興味津々に画像や動画を見たり、たくさんの質問をしたりします。

昨年度の通級生の中には、2年間ずっとオンライン授業で、学校生活はもちろん勉強も十分にしていないという子どもがいました。今後、来日する子どもたちは、コロナ禍の教育活動の制限で、経験するはずのものが未経験のままになっていることも考えられますので、十分な配慮が必要です。

村田ニーニャ相談員のフィリピン紹介



コロナ禍の学校・教育事情

フィリピンでは、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で2020年3月から長い間休校が続いていましたが、2020年10月にオンライン授業、印刷教材、テレビやソーシャル・メディアを通じた授業放送などによる「混合学習」プログラムがはじまり、通常よりも4ヶ月遅い"新学期"となりました。しかし、多くはモジュール学習 (Modular Learning) と呼ばれる自宅学習形式でした。これは1~2週に1回程度、保護者が学校へ行き、冊子形式の課題を受け取り、子どもが自宅で取り組んだら、保護者が提出しに行くというものですが、授業で習っていない未習の内容を自分で取り組む形でした。こうした学習形式には、保護者から「これは学校じゃない」などの声が上がりました。保護者が子どもと一緒に勉強しないと、提出期限までに間に合わない、課題については分からないままで提出をするなども大きな問題になりました。

一方で、ネットがつながる家庭では教材の内容が分からない時は、先生のソーシャル・メディアへ連絡をしたり、質問したり、答え合わせをしたりすることができましたが、こういった家庭は少数でした。

また、17歳以下の子どもたちは、パンデミック以来、外出禁止令が継続されたこともあり、自宅かその周辺で過ごすことしかできていませんでした。地域によっては、外にいる時間制限もありました。子どもたちは外で思いきり身体を動かして遊ばず、家の中で過ごすしかない状況でした。

2021年11月には、一部で対面授業が始まりました。でもこれは、フィリピンの生徒のうちの、1%未満でした。2022年2月には教育省から段階的な学校再開の方針が示され、感染が低い地域では、子供たちが学校に戻ってきました。学校に入る前に体温を計り、フェイスマスクとフェイスシールドをつけ、自分の机で昼食を食べ、トイレへ行くときも担任の許可が必要です。子ども同士の接触を減らすために、プラスチックで覆われた机に座ります。クラスは、15人以下のグループで、授業は3~5時間です。

コロナ禍のフィリピンの子どもたちは、こうした厳しい教育環境で過ごしていました。今後、新たに来日してくる子どもたちには、母国でどう過ごしていたかを確認してあげてください。



↑パンデミックが始まった頃の様子



↓現在のフィリピンの学校の様子(少人数授業)